

岩城分場では平成13～17年度に「せとかのハウス栽培技術開発試験」に取り組み、大果で正品率の極めて高い果実生産技術を開発するとともに、「せとか」が消費志向に即した有望な新商材であることを明らかにした。このため、近年県内生産者の関心が俄に高まり、ポスト伊予柑品種の一つとして産地化が進み始めた。しかしながら施設栽培では初期投資に多額の経費を要することから、実際には露地栽培を主体に増加しており、施設栽培ではさほど問題とならない隔年結果や日焼け・裂果といった生理障害や寒害・鳥害等発生など

新たな課題が生じている。また、「せとか」は成熟期が3月であるため、一部の産地では寒害回避のため未熟状態で収穫されるケースも出始めており、ハウスもので得た高い評価を低下させはしないかとの懸念も出始めている。こうしたことから、岩城分場では、露地栽培における高品質生産の技術を確認するため、平成18年度から5カ年の計画で「せとか越冬完熟露地栽培試験」への取り組みを始めたので、試験計画の概要について紹介する。

(岩城分場 主任研究員 喜多景治)

〔試験構成〕

せとかの越冬完熟露地栽培技術の開発

- 1) 安定生産技術の確立
 - (1) 最適連年結実法の検討
越冬完熟に適した着果量、摘果時期、整枝せん定法の開発
 - (2) 隔年交互結実法の検討
交互結実技術のせとかへの応用
- 2) 品質向上技術の開発
 - (3) 果実形質と品質
着果部位、果実の大きさ、収穫時期などの検討
 - (4) 生理障害果発生の防止
裂果や日焼け果の発生防止、着色後の退色防止法の開発
- 3) 果実保護技術の開発
 - (5) 各種資材を用いた寒害防止・鳥害防止法の開発
資材の種類と効果およびコストの検討
 - (6) 省力化技術の開発
簡易フレームによる防除、除草等の省力化



写真1 露地せとかの収穫



写真2 露地せとかのサニーセブン樹列被覆による防寒・防鳥・退色防止効果の検討



写真3 低コストな簡易フレームによる省力化の検討